地域・駅・新幹線ニュースレター

はっしん！ 新青森

青森県立青森西高等学校 Aomori Prefectural Aomori Nishi Senior High School × 青森大学 AOMORI UNIVERSITY

2025年5月20日（火）
第65号【隔月刊・FREE】
青森大学・青森西高等学校
高大連携事業
協力：JR東日本新青森駅
青森大学社会連携センター

開業15周年 地域とともに

新青森駅 吉田第7代駅長が抱負

JR東日本の新青森駅の第7代駅長に、青森市出身の吉田和男さん（47）が着任しました。2010年12月の新青森駅開業時に続く2度目の同駅勤務となります。地元と強いつながりのある吉田駅長はインタビューに、「地域の皆さんと力を合わせて、12月4日の開業15周年を迎えたい」と、熱い思いと抱負を語りました。

吉田駅長は2001年にＪＲ東日本に入社後、仙台支社管内の宮城県と福島県で駅勤務、車掌、宣伝などの業務に携わってきました。

東京の本社広報部を経て2009年12月、盛岡支社に配属され、1年後の東北新幹線全線開通・新青森開業に向けた準備を担当することに。「地元・青森のために役立つ仕事をしたい」と、新幹線関連の業務を志望したといいます。

翌年5月に八戸駅勤務、さらには11月に新青森開業準備駅勤務となり、2010年12月4日の新青森駅開業日を迎えました。当日は、セレモニーなどに追われる駅長の仕事を代行する「当務駅長」となり、前日から丸2日、寝る間も惜しむほどの多忙ぶりだったそうです。

その後、東日本大震災の復興や地域活性化等にも携わり、約15年後の今年3月1日付で、茨城県・龍ケ崎市駅長から新青森駅長に着任しました。

「駅のおもてなし活動に協力してくれる、近くの新城中学校の生徒と話してみると、新幹線に乗ったことのない生徒がいない。本当に地元の皆さんに定着していると実感しました」

最近、実感しているのは「鉄道はチームワークだ」という言葉だそうです。「鉄道は1人では動かせない。さまざまな人が力を合わせてこそ動かせる。最高のチームワークづくりを目指したい」と力を込めます。

「新青森駅は青森市だけでなく、青森県全体の玄関口としての役割を果たしています。どのように利用されているか、地域の中の役割をしっかり確認する良い機会にしたい。15周年をどう祝うか。皆さんに喜んでいただけるよう、地元の方々と相談しながら、PR方法を考えていきたいですね」

◇

<1978年青森市生まれ。三内中、青森高を経て2001年弘前大学卒>

〝原点〟弘前時代の資料を紹介

青森県立美術館 「描く人、安彦良和」展

「機動戦士ガンダム」「宇宙戦艦ヤマト」など日本のアニメ史に残る作品に携わった安彦良和の回顧展「描く人、安彦良和」が6月29日（日）まで、青森県立美術館で開かれています。アニメやイラストの原画、キャラクター設定ラフ画など1,000点を超える資料を通して、独自の世界観と人物造形を展開してきた足跡に迫ります。全国を巡回する同展の中で、彼が弘前大学に籍を置いていた当時の貴重な刊行物なども青森会場限定で紹介し、一つの原点としての学生生活を見通せる構成となっています。

②

③

展示は他の会場と順番を変え、「機動戦士ガンダムTHE ORIGIN」の漫画とアニメ、漫画「乾と巽－ザバイカル戦記－」といった直近の作品を紹介する第6章から始まります。次いで第1章として、高校までを過ごした北海道遠軽町の暮らしをたどります（写真①）。中学時代の彼が独自に編み出した、創作活動のメモを連想させる授業ノート「重点整理帳」には、既に〝作家〟の風格が漂います。

①

その後、城下町へのあこがれなどを理由に弘前大学へ進学。全国を覆っていた学生運動に身を浸しながらも、模倣を嫌って独自の立ち位置やスタイルを追求していた様子が、オピニオン誌「こんみゆん」に寄せた文章などからうかがえます。

しかし、大学封鎖の責任を問われて逮捕、退学処分となり、しばらくは弘前市でタウン誌「Q都」の表紙（写真②）やマッチの絵柄を描いて暮らします。やがて東京へ出て、手塚治虫の「虫プロ」に所属して、アニメ制作者としての道を歩み始めました。青森会場独自の資料として、逮捕時の地元紙記事や「Q都」の実物が注目されます。

第2章は、注目を浴びるきっかけになった「宇宙戦艦ヤマト」などの資料、第3章は半世紀近く人気を保ち続けている「ガンダム」シリーズとその背景、第4章はアニメと漫画、小説など多彩な創作を手掛けた1980年代、第5章は日本の古代や近現代、キリスト教をテーマにした漫画家としての活動を解説しています。

担当の奥脇嵩大学芸員は「ずっとサブカルの領域に身を置き、常にフラットな視点からペンを持ち続けた彼の存在という切り口で見ると、時代の流れや歴史の揺り戻しの様子が分かりやすい」と感想を語っています。

また、「弘前大学の協力を得て、大学所蔵の資料も借り出し、展示の順序を入れ替えました。独自の反戦と平和運動を模索していた学生生活が、後の作品世界に大きく影響していることを、青森会場の皆さんに見てほしかった」と意図を語っています。大きな空間を持つ青森県立美術館の特長を生かし、活動の区切りと連続性をともに感じ取れるよう工夫したといいます（写真③）。

作品全体に通底する、「動画」よりもダイナミックな動きと存在感を発する原画の筆致、矛盾に満ちた社会や人間関係の設定、困難な環境に苦しみながらも前を向き続ける登場人物の人生観を通じて、魅力的かつ将来への希望を感じさせる展示となっています。

観覧料は一般1,700円、大学生1,000円、

©2025 MOTOO KUSHIBIKI

<ご自由にお持ち帰り下さい>

ポスター等は許諾を得て使用しています

三内丸山遺跡

特別展「縄文時代のはじまり」
暮らしの変化 土器の誕生

青森市の三内丸山遺跡で 6 月 29 日（日）まで、本年度の特別展「縄文時代のはじまり－最古の土器登場」が開かれています。旧石器時代から縄文時代初めにかけて、地球規模で起きた気候と動植物の変化、当時の人々の営み、そして土器の誕生と移り変わりについて、分かりやすく解説しています。

◇　◇　◇

地球は温暖化と寒冷化を繰り返し、約 2 万年前に最後の氷河期がピークを迎えました。当時の日本は土器のない旧石器時代で、人々は寒冷な環境下で遊動生活を送っていたと考えられ、青森県内では田向冷水遺跡（八戸市）などの遺跡が見つかっています。

やがて気候が温暖化に転じ、それに前後して土器が生まれました。青森県外ヶ浜町の世界遺産・大平山元遺跡では、約 1 万 5,000 年前と国内最古級の「無文土器」が出土しており、旧石器時代から縄文時代への移行をめぐる非常に貴重な遺跡と位置づけられています。

約 1 万 4,000 年前、土器の表面に粘土ひもを張り付けた「隆線文土器」が現れ、県内では表舘（1）遺跡（六ヶ所村）などの出土例があります。続いて約 1 万 3,000 年前に、人の爪などを押し付けた「爪形文土器」（写真㊧）が登場し、同じく鴨平（2）遺跡（八戸市）などで見つかっています。さらに約 1 万 2,000 年前、さまざまな手法で多様な文様を施した「多縄文土器」が出現し、櫛引遺跡（八戸市）で多くの土器が出土しています。これらの土器の時代は縄文時代の「草創期」と総称されています。

展示では、旧石器時代の狩猟に使われたとみられるナイフ形石器、同じくカミソリの替え刃状の石器・細石刃、縄文時代草創期の各時期に特徴的な土器や石器、動植物に関する資料を展示して、1 万年以上にわたって続いた縄文時代の起源を解説しています。

人々の手業を示す磨製石斧、細石刃とその加工プロセスが分かる細石刃核（写真㊨）、金雲母を胎土にわざわざ練り込んだ鴨平（2）遺跡の〝金色に輝く〟爪形文土器といった展示物が目を引きます。

特別展の観覧料は一般 890 円、大学生等 450 円、高校生以下は無料です。本観覧料で三内丸山遺跡を含む常設展も観覧できます。

また、2024 年度の三内丸山遺跡の発掘成果を紹介する「さんまる速報展！ 2024」も 6 月 29 日まで開かれています。

（5 月 26 日・月、6 月 23 日・月は休館）

あおもり桜マラソンを応援

青森西高校「青西おもてなし隊」がゆく㊺

青森県立青森西高等学校の「青西おもてなし隊」生徒たちが新年度の本格的な活動をスタートさせました。4 月 20 日には青森市で開かれた「2025 あおもり桜マラソン」でランナーの応援を行い、レースを盛り上げました。

隊長の工藤桜子さん（3 年）をはじめ、午前は 14 人、午後は 7 人が参加し、10km コース折り返し地点の石森橋近くで応援活動を繰り広げました。午前中は雨模様の天気でしたが、午後は日が差し、まずまずのマラソン日和となりました。

「青西」の文字が染め抜かれた、えんじ色の法被をまとった生徒たちが、手製のペットボトルのマラカスを振りながら「がんばれー！」と声援を送ると、元担任だったランナーが生徒に駆け寄り、ハイタッチする姿も。多くの人が「ありがとう」と手を振り返したり、「いいね！」と親指を立てたりして通過していきました。

2 年生で初参加の水谷仁美さんは「意外に人が多く、大きな声を出さないと届かない」、同じく對馬心美さんは「青森県民のつながりを感じた。あすは筋肉痛かも…」と語りながら、ランナーの反応に大きな手応えを感じていた様子でした。

三内丸山遺跡センター

見学時間　9:00～17:00（入場は閉館の30分前まで）
（6 月 1 日～ 9 月 30 日は 18:00）
休 館 日　毎月第4月曜日（祝日の場合は翌日）、12月30日～1月1日
観 覧 料　一般：500 円（400 円）大学生等：250 円（200 円）
高校生以下：無料
※（　）内は20名以上の団体料金
※特別展は別料金。展示内容により変更する場合があります。
※個人観覧者は、青森県立美術館のチケット呈示で割引特典あり。
（詳しくは各施設のチケットカウンターまでお問合せください。）

お問合せ
〒038-0031 青森市三内字丸山305
TEL.017-766-8282 ／ FAX.017-766-2365
URL https://sannaimaruyama.pref.aomori.jp

縄文⇄芸術

青森県立美術館

開館時間　9:30～17:00（入場は16:30まで）
休 館 日　毎月第2、第4月曜日（祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月26日～1月1日）
※企画展開催時、展示替等により変更する場合あり
観 覧 料　一般700円（560円）／大学生400円（320円）／
18歳未満および高校生以下　無料
※（　）内は20名以上の団体料金
※心身に障がいのある方と付添者1名は無料
※企画展は別料金。

お問合せ
〒038-0021 青森市安田字近野185
TEL.017-783-3000 ／ FAX.017-783-5244
URL https://www.aomori-museum.jp

新青森駅 ⇒ 三内丸山遺跡センター：循環バス「ねぶたん号」（東口）約 15 分･300 円、タクシー（南口）約 10 分、徒歩約 30 分
⇒ 青森県立美術館：「ねぶたん号」（東口）約 11 分･300 円、タクシー（南口）約 10 分、徒歩約 40 分

Facebook ページ
Instagram アカウント

＜ネット情報＞
Facebook ページと Instagram アカウントを開設し、独自の記事・情報を掲載しています。ご意見をお寄せ下さい。また、PDF 版を青森大学社会連携センターの Facebook ページに掲載しています。いずれも、右側の QR コードからご覧いただけます。

☆このニュースレターは、青森大学社会学部・櫛引研究室が企画・制作し、文責を負っています。お問い合わせ、ご意見等は下記連絡先へお願いします。

〒030-0943 青森市幸畑 2-3-1　青森大学社会学部
櫛引素夫　電話 017-738-2001 内線 731
shin-aomori@aomori-u.ac.jp

FB ページ　Instagram　青森大学社会連携センター

©2025　MOTOO KUSHIBIKI　＜ご自由にお持ち帰り下さい＞　ポスター等は許諾を得て使用しています